

研究ノート

大学と美術館の連携Ⅱ  
—創価大学と東京富士美術館の連携事業  
「美術館を活用した授業」報告—

創価大学非常勤講師・東京富士美術館学芸員

白根 敏昭

創価大学助教

高玉 美葉子

東京富士美術館学芸員

平谷 美華子

要 約

『創大教育研究』第26号において「大学と美術館の連携—創価大学と東京富士美術館の連携事業『美術館を活用した授業』報告—」を行った。本稿では、その後の連携事業の進捗状況の報告を行う。さらに、海外における美術館を活用した教育的活動も紹介しながら本学に隣接する位置に開設された東京富士美術館の存在意義とその役割について考察し、より有意義な授業の構築と活発な連携活動が促進することを期待したい。

I はじめに

文化庁は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、小学生や中学生が様々な文化事業（文化プログラム）を経験できるよう、文化庁が取り組みの事例等をまとめた冊子「学校・地域で取り組む『文化プログラム』事例ノウハウ集<sup>1</sup>」を発行している。2018年度の同冊子に、その事例として本学と東京富士美術館の連携授業である「ミュージアム・エデュケーション」の中の東京富士美術館との鑑賞プログラムが掲載された。本学教育学部では、2015年度より東京富士美術館が市内の小中学校を対象に実施する鑑賞プログラムに協力し、児童・生徒が主体的に作品や作家の

---

キーワード：美術館と教育 鑑賞プログラム グローバル化時代 多様性

魅力を発見できるよう、本学学生が作品と鑑賞者をつなぐ“対話による鑑賞”を行い、学校教育に大きく貢献している。さらに近年は、グローバル化時代を見据えて取り組みを開始した大学英語教育との協働も実り始めてきた。これも偏に担当教員と学芸員の情熱と熱意の上に大学と美術館の双方の支援体制があって成り立っていることである。

以下、その後の大学と美術館の連携状況を報告し、美術館の存在意義と役割について考察する。

## Ⅱ ミュージアム・エデュケーションのこれまでとこれから

### ■これまで

美術館が徒歩数分で移動可能な位置にあるという立地条件が整った創価大学と東京富士美術館の連携授業である「ミュージアム・エデュケーションⅠ・Ⅱ」（2015年前期・後期開設）が開設から4年を経た。この間、100名以上の学生が本授業を履修した（2015年29人、2016年30人、2017年29人、2018年26人）。

東京富士美術館は、今から35年前の1983年11月3日に開館した。言うまでもなく、創立者池田大作先生の「若き日に一流にふれた人は社会人となって豊かな人生をおくることができる」との信念から、「一流の本物を学生たちに見せてあげたい」との思いにより大学に隣接して美術館が建設されたことによる。大学の教員と同時に美術館の学芸員である筆者は、学生の皆さんたちに、初回のシラバスの説明の折に、まずはその話を冒頭に行うことにしている。

本科目の原点は、2013年・2014年の2年間、サービスマーケティングで総合科目の一つである「社会貢献とボランティア」を履修した学生の中から有志を募り、東京富士美術館の教育普及活動のサポートへの取り組みをしたことに始まる。これはボランティア活動に参加し、レポート提出により単位認定するもので、具体的な活動内容は、学芸員のサポートや八王子市内の小中学校等の団体鑑賞会におけるギャラリートーク、ワークショップのサポート、教材開発などを行った。2015年度からは、この2年間の試行を経て新たに教育学部の科目として「表現と鑑賞」及び「教育とボランティア」の授業の双方からどちらかを履修した学生を対象に「ミュージアム・エデュケーション」が開設された。本授業は、実践的学習として教育現場での応用力の養成も目標としているので実り多い成果が得られるものと考え。そのため、これまで履修学生の多くは将来教育関係の職業に就く予定で真剣に取り組んでいる。

なお、前述以外の連携授業としては教育学部の「基礎演習」「図工科教育」「教育とボランティア（ボランティア入門）」（東京富士美術館での「ボランティア①、②」）がありその鑑賞教育（団体鑑賞）の対応をいずれも教育普及担当の学芸員が担っている。

2016年度と2017年度は八王子市内の小学校との連携の中で、ミュージアム・エデュケーションの授業内で学生と児童との「対話による鑑賞」を実施することができた。これは、小学校の担当教諭側に他市での美術館と連携した授業の実践経験があったことが大きな要因である。本年（2018年）も12月に同教諭との大学の授業内でのコラボレーションを行う予定である。

#### ■現場教諭がみた学生の授業評価

2017年12月に行った市内2校（八王子市立元八王子東小学校4年生47名、八王子市立清水小学校3年生34名）との授業も大学生による授業内コラボレーションであった。その折の教員の授業の振り返りを抜粋し紹介したい。

K教諭：他市では全校美術館訪問を実施していた。そこでは、学芸員によるギャラリートークに参加して、プロから子どもたちは学びを得ていた。その後自由鑑賞をしていた。今回は学生によるギャラリートークであった。昨年は児童に聞いたら2～3人くらいしか来館したことのある子どもがいなかったため、事前学習をした。今回は来館した子が昨年よりも多かったこともあり、事前学習をせずに臨んだ。私は4年生にこだわっている。それは、10歳までの感受性が高い時に触れさせたいとの思いがある。

S教諭：学生のギャラリートークを聞いて、空間にまで思いを馳せた発問があり、子どもたちは想像力をかきたてられていてよかった。発言も豊かな子どもたちが多かった。

N教諭：昨年も授業を参観させていただき、違いがわかった。今年の子は、駆け回って元気いっぱいに見ていた。飛びついている感覚。学生さんがトークをする上で、手作りの教材やシナリオをよく考えて準備してきているのが印象的であった。また、自由時間でもその視点を活用して鑑賞できていた。

H教諭：聞く力が育っていると思った。子どもと先生との人間関係の賜物だと思った。作品選定も良かったと思う。5つの約束を使っている学生も多く、良かったと思う。スフィンクス（ユベール・ロベール《スフィンクス橋の眺め》1767年より）は、4年生は知らないもので、実際の写真を見せたり、ルーブル美術館を見せたりして良かった。しかし、「正解を見せたい」が強く、もしかしたら誘導尋問的にも見受けられ、その後の自由鑑賞をどうするかが課題。

I教諭：散歩しているみたいでいい雰囲気であった。スフィンクスでは、何が描かれているか、など想像させる設問もあった。ただし、おとなしい子はウォッチャーになってしまっていた。発言なしの子もいた。エラニー（カミーユ・ピサロ《春、朝、曇り、エラニー》1900年、および同《秋、朝、曇り、エラニー》同年）では、作者の意図などを学生が「よく見て想像する」方向にもっていき盛りあがっていた。りんごの木の写真を見せていた。

Y校長：今日の4年生は美術館に行ったことのある子が13～14人。でも「来たこと

あるから知っている！」という子は少なかった。Y小のM先生はここ4年間、「地域の教育資源の活用を！」との思いで取り組んでいる。実際、行き帰りのバスは遠方だと時間がかかる。また、寝をしてお邪魔しないといけないと思っているので、例えば、昨年、一昨年と行ったから今年も、は違う。踏襲はよくない。連れてくる子どもを育てる事。大学生については、外部人材の活用の領域に入るであろう。教育を目指す人材を作る意味では、学生の段階から直々に教員が関わり育てるべきであり、教員採用試験でも、ぜひこの美術館でのボランティア体験を語って欲しい。

I 教諭：背景と太陽の作品（マックス・エルンスト《青い背景の太陽》1962年）で、「これ何に見える？」から始まり、「カレーマン」と答えた子がいて、盛り上がった。とてもいい雰囲気であった。ただし、学生が9項目ほど想定していたチームもあり、想定した内容をこなそうと次の質問、次の質問と焦る雰囲気も見受けられた。対話を楽しむ余裕もあると良い。質問を考えておくのは良いが、もう少し的を絞り、臨機応変さがあるとなお良いと思う。自由時間で、シルエットで作品を見つけさせるワークシートは、3年生という年齢から考えても皆が楽しんで取り組めてよかった。飽きずに展示室内をぐるぐると回り楽しんでた。

以上のように教育現場である学校とのコラボレーション授業は、事前打合せ・本番・授業後の振り返りなどを通して、学生側と教員側の双方向に良い刺激となっている。

### ■これから

本年11月、東京富士美術館は開館35周年の佳節を迎える。次の40周年（2023）、50周年（2033）を開く挑戦の日々でありたい。これまでの東京富士美術館の歩みは、民衆の手に美術・芸術を取り戻し、人間文化を豊かに創出するとともに、美術・芸術の力で世界の民衆の心と心を結び、世界の平和構築に寄与してきた歴史がある。この使命を継承しグローバル化時代に即応した新しい体制を構築することが急務である。具体的には英語による作品解説ができるスキルが身につくような授業を美術館と連携して行うなど、ミュージアム・エデュケーションの授業内容も新たな一歩を踏み出す時期に来ていると考えている。（白根敏昭）

## Ⅲ 美術館と大学英語教育の協働—世界市民の育成に向けて

グローバル社会に貢献する人材をいかに育成するか—それは現在、さまざまなレベルの教育機関に求められている課題であるといえる。国家的事業に位置づけられたグローバル人材育成においては、とりわけ大学の責任が大きいとされ<sup>ii</sup>、そのための大学改革や各種事業が行われてきた。いうまでもなく、創価大学は「スーパーグローバル大学創成支援事業」に選出された大学であり、グローバル人材育成のトップラン

ナーとしての使命がある。筆者は、創価大学ワールドランゲージセンター教員として英語教育に取り組む中で、美術作品を通じた語学教育が、グローバル時代に求められるスキル育成方法として有効であり、さらに世界市民教育に重要な役割を果たすことを理解してきた。このセクションでは、東京富士美術館協力のもとで行われた英語授業と、その世界市民教育への可能性、さらに、美術館と大学英語教育との協働による今後の課題について述べていきたい。

### ■美術館でのプレゼンテーション授業

2017年の春学期と2018年春学期の2回、筆者が担当する英語クラスの最終課題となるプレゼンテーションが、東京富士美術館で行われた。2017年は教育学部の1年生19名、2018年は野球部の1年生11名の、いずれも共通科目として設定された English I の授業である。プレゼンテーションを行うにあたっては、事前に3回にわたり美術館でのペアワークを行った。まずは学生同士でペアを組み、常設展示の中からプレゼンテーションを行う作品1点を選び、選んだ理由を英語で書いて提出する。次にパートナーと共に絵を観察し、作品について語るために必要な英語の語彙を指定されたシートに書き出す。その後、教員から提示された質問や、学芸員との対話を通して、パートナーと共に絵をさらに分析する。その分析の結果や議論の過程で学んだことを3点に絞り、英語のプレゼンテーションとしてまとめ、最終日に、その作品の前でプレゼンテーションを行うという授業である。学生たちは、世界レベルの美術作品に囲まれた空間で、クラスメートや教員、学芸員と、自ら選んだ絵画について議論し、その結果をどう英語で表現するかを試行錯誤しつつ、プレゼンテーションを作り上げていった。学生のフィードバックからは、教室という安全地帯ではなく、美術館ギャラリーという場所で、一流の作品を通してプレゼンテーションをやり遂げたことが、英語に対する大きな自信になったことがうかがえた。さらに後述のように、お互いの意見の差異から新しい観点を学び、想像力・創造力を働かせ、また英語で社会的、哲学的な問題を論じることに挑戦するなど、英語とプレゼンテーションスキル以外の思考スキルの向上にもつながった。正門の向かいに美術館がある創価大学であるからこそ可能であった英語授業といえる。

### ■グローバル化時代の英語教育と美術鑑賞教育の有効性

この美術館での英語授業は、批判的思考力やコミュニケーションスキル、協働のスキル、創造力といったグローバル時代必須のスキル育成において、美術を通じた教育が有効であるという先行研究に基づいて計画された。英語力の向上と同等にそれらのスキル育成に重点を置く理由は、少なくとも共通科目としての大学英語においては、英語という言語の習得にのみフォーカスした教育からは脱却すべき時が来ていると思うからである。テクノロジーの発達に伴う情報・モノ・人のグローバルな移動が加速し、英語が世界各地でコミュニケーションツールとして使われている現在、もはや英語は、従来「ネイティブスピーカー」と定義されてきた国民、つまりアメリカ人やイ

ギリス人のものではないという認識が広がっている<sup>iii</sup>。従来の英語教育は「ネイティブスピーカー」にいかにかに近づくかという点に重きが置かれ、それ故に文法的正しさや、アメリカ人、イギリス人のような発音習得に、過度ともいえるこだわりをもってきた。一方で、グローバル化が進む世界の英語教育では、さまざまな言語や文化の背景を持つ人々と英語を使い協働していく「英語エキスパートユーザー」をいかに育てるか、に焦点が移ってきている<sup>iv</sup>。従来「ネイティブスピーカー」として定義されてきた人々のように流暢に誤りのない英語を話せたところで、創造的なアイデアを生み出す柔軟性や、異なる考え方、行動様式への寛容性がなければ、様々な文化・教育・言語・宗教的背景を持つ人々と協働して問題を解決していくことは難しい。英語はいま、グローバル社会で必要なスキルと資質の育成という枠組みの中で習得されるべき言語となっている。それらのスキル養成と英語の役割について、学生自身が明確に自覚し、その習得に向けて協働し学ぶ場をどのように作り出すかが、これからの大学英語教員の重要な役割であろう。

そのグローバル化時代に必要なスキルを論じる枠組みのひとつに、Communication (コミュニケーション) Collaboration (協働) Critical thinking (批判的思考) Creativity (創造性) を中心とした、21世紀型スキル (4Cs) という考え方がある<sup>v</sup>。美術に関する知識を一方向的に与えるという鑑賞方法とは異なる、参加者間の議論をベースとした新しい鑑賞教育は、こういったスキルを育成するのに有効であるという研究が、米国を中心に数多くなされている。例えば、コミュニケーション力、協働スキル、批判的思考力のいずれも必須とされる医師や警察官などのトレーニングに鑑賞教育が導入された各種研究では、データとしてそれらのスキルの伸びが示されている<sup>vi</sup>。学校教育の分野でも、議論を通じた鑑賞教育が、批判的思考力やコミュニケーションスキルの伸びに有効であることがさまざまな研究により支持されており<sup>vii</sup>、さらに創造力を伸ばすアクティビティにつなげる教育実践も行われている。筆者は創価大学大学院在学中に、これらの先行研究をもとに語学教育のカリキュラムを作成したが、今回の授業もグローバル化する世界で変化が求められる英語教育に、21世紀型のスキル養成に有効な美術鑑賞教育を導入することにより、学生にグローバル化社会に貢献する基礎となる学びの機会を提供しようと企画したものである。

### ■美術を通じた語学教育と世界市民育成

美術館での授業は、美術を通じた語学教育が世界市民教育に重要な役割を果たすことを、一教員として学生から学ぶプロセスでもあった。ここでいう「世界市民」とは、言うまでもなく、一般に使われる「グローバル人材」の定義とは異なる。日本における「グローバル人材」育成の議論は、グローバル競争の中で日本企業が勝ち抜くにはどうしたらよいか、という観点から進められてきた。つまり、日本人として国際社会で堂々と渡り合い、成長分野を牽引することのできる人材、というのが、日本政府および社会のグローバル人材像であるといえよう。例えば文科省は、グローバル人材の

定義を次のように提示している。

「日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野で活躍できる人材<sup>viii</sup>」

また、経産省はグローバル人材を

「主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材<sup>ix</sup>」

と定義している。翻って創価大学は、これらのグローバル人材の定義を包含しつつも「世界市民の輩出」というより広い観点からの理念を打ち出している。その基盤が、1996年6月13日、コロンビア大学ティーチャーズカレッジでの創立者の講演「『地球市民』教育への一考察」である。同講演では、地球市民の模範として「1. 生命の相関性を深く認識しゆく『智慧の人』」「2. 差異を尊重し、理解し、成長の糧としゆく『勇気の人』」「3. 身近に限らず遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し連帯しゆく『慈悲の人』」という三点が示されている。この地球市民の定義こそ、一国の経済的繁栄のみを目的としたグローバル人材の育成ではなく、地球規模で平和と持続可能な繁栄を先導する「世界市民」の輩出という創価大学の教育理念の核といえる。世界市民教育の観点から、改めて美術館における一連の授業を振り返り、また、学生のプレゼンテーション内容を分析する中で、授業に参加する学生たちがこの三点につながる学びを行っていたことが浮かび上がった。以下にその事例を示しておきたい。

### 1. 生命の相関性を深く認識しゆく「智慧の人」

野球部1年生のベアは、ナポレオンの肖像画のうちの1点に強烈に魅かれた。美術館でのペアワークでは、この人物の何に魅かれたのかを考え、学芸員の話に耳を傾け、絵の背景にある歴史や描かれた意味を学んだ。その過程で、描かれたナポレオンは手の届かない過去の偉人ではなく、彼らにインスピレーションを与え、自らの物事に向かう姿勢を映し出す存在となった。このベアに限らず、美術館のギャラリーから1点の絵画を選び、分析するという行為を通して、画家や、そこに描かれた人物や歴史との対話が生れていた。もはや歴史は過去の切り離されたものでなく、画家も遠い世界の人間ではない。描かれた情景や人物は、現実とかけ離れた存在ではなく、意味を持った存在として目の前に現れてくる。さらには、自分とは異なる背景を持つパートナーと作品について議論し、共にプレゼンテーションを作り上げる過程を通して、学びが深まってゆくことも多くの学生が経験した。こういった、時空を超えた対話、そして、いま共に学ぶ仲間との対話によって、様々なつながりの中の自身を知る機会が生まれたのだと思われる。

## 2. 差異を尊重し、理解し、成長の糧としゆく「勇気の人」

ペーパーテストを中心とした従来型の日本の教育では、正しい答えを出す能力と知識量が必要とされてきたが、一方で美術作品の解釈に正解はなく、多種多様な解釈が可能である。時には、この絵の中には何が描かれているかという簡単な質問さえ、多彩な答えを触発する。抽象絵画を選んだ教育学部のあるペアは、2人が同じ絵を見ているにもかかわらず、全く異なる事物や情景を認識していることの面白さに魅了された。そして、お互いの認識や意見が違えば違うほど新しい学びがあるという、差異をもたらす価値について、絵画を通して具体例を挙げながらプレゼンテーションを行った。こういった「差異から生まれる学び」「違うことの価値」は、多くのペアが授業中に、またプレゼンテーションやフィードバックの中で触れていた点である。

## 3. 身近に限らず遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し連帯しゆく「慈悲の人」

いくつかのペアは、絵画の分析を通して、人に苦しみを引き起こす様々な行為について語った。ある野球部の学生は、ギリシャ神話を題材とした絵画を選び、教科書的な解釈から自らの想像まで複数の解釈を提示したが、最後の解釈は、現代におけるいじめの傍観者たちの姿であった。「いじめを傍観することはいじめと同罪である」というプレゼンテーション後半のメッセージからは、従来の解釈の上に、描かれた情景に同苦せずにはいられない自身の思いを重ねたことが伝わった。また、教育学部のあるペアは、描かれている人物が以前通っていた塾の男性講師にそっくりであるという単純な理由で、17世紀の肖像画を選んだ。しかし、肖像画のタイトルが《婦人の肖像》となっていることに気が付く。このペアは、自分たちの認識とタイトルとのギャップを出発点として、なぜ自分たちがこの人物をひと目で男性と判断して疑わなかったのかを考え、作品に描かれた人物と、自らが持つジェンダーのステレオタイプを分析した。そして、人間がいかに容易に先入観に陥るか、そして先入観に基づく決めつけがいかに他人を苦しめるかということを学んだ。プレゼンテーションでは、ステレオタイプに基づくラベル付けでなく、対話を通して人を知る努力の重要性を英語で伝えた。

このように学生たちは、世界市民教育の根幹となる三点につながる学びから、美術を通じた教育が世界市民の育成に貢献する可能性を示した。それはまた、英語に対する自信と21世紀型スキルを同時に向上させることが可能な美術館での英語教育が、語学力とスキルを備えた世界市民の育成に大きなポテンシャルを持つことを示している。

### ■永続的な協働への課題

世界市民教育に貢献する大きな可能性を持つ美術館での語学教育であるが、同時に、実践を通して今後の課題も浮かび上がってきた。それは、大学教員と美術館の協働の仕組み作りである。永続的な協働を行うには、美術館での授業を企画・実行するにあたり、まずはこれまで個々の教員が行ってきた手続きを統一し、共有する必要が

あると考える。どのタイミングで誰に（どの部署に）連絡を取り、どのようなステップを経て授業が可能になるか、という仕組みの明示と共有である。その中でも特に重要と考えられるステップは、授業のゴールと、そのゴールに到達するための手段の共有であろう。筆者が担当する English I を例に挙げれば、新入生を対象とした共通科目の英語クラスである以上、共通シラバスに明示された内容の習得が大前提となる。したがって「智慧の人」「勇気の人」「慈悲の人」という地球市民の模範を不動のゴールとしつつ、授業のゴールは、シラバスに明示された英語スキルとアカデミックスキルの習得であり、美術館における鑑賞教育はあくまでその手段と捉えられる。一方で、この関係は決して固定したものではない。例えば、オール英語で日本美術を学ぶといった CLIL (Content and Language Integrated Learning: 教科と語学学習を統合したアプローチ) ベースのクラスや、英語で鑑賞教育の手法を学ぶといったクラスであれば、ゴールと手段の内容とその関係性は、共通科目の英語とは大きく異なってくるであろう。重要なことは、どのようなカリキュラムの、いかなる学習目標のもとで美術館での授業を行うか、そしてその目標を達成するための手段は何かという点についてオープンに議論し、合意形成を行うステップを組み込むことである。美術館での授業を計画し、成功させるための合意形成の仕組みが明らかに提示されたとき、大学英語教育と美術館の協働における次のステージが開かれると考える。(高玉美葉子)

#### Ⅳ ミュージアムの役割と東京富士美術館を活用した教育的活動

##### ■ミュージアムの役割と教育<sup>x</sup>

人類の足跡・精神文化遺産を「保存・調査・伝達・教育」する役割を担うミュージアムにおいて<sup>xi</sup>、それらを地域・世界・未来へと人々へ還元していくための「学びの装置」として、さらには人々が対話や思索を深める「価値創造の場」としてのミュージアムの構築を目指し、教育機関との連携を確立・促進していくことはミュージアムのミッションそのものである。

1960年12月4日、第11回 国際連合教育科学文化機関（以下「ユネスコ」という<sup>xii</sup>）総会において「博物館をあらゆる人に開放する最も有効な方法に関する勧告<sup>xiii</sup>」が採択された。そこでは、具体的な18項目にわたる勧告があり、その16項目めにはミュージアムにおける教育に関連して以下のようにある。

- a 各博物館が、博物館の教育目的への利用を組織化するために館長の監督下に職員として教育専門家をおくこと。
- b 博物館が、教員の尽力を求める教育担当の部をおくこと。
- c 館長、教員で構成する合同委員会を、博物館を最も有効に教育目的に利用することを保証するため、地方または地域水準で設立すること。

しかしながら、国内において本勧告に対して改善をはかったという博物館の記録は見

あたらない。1960年当時の国内の博物館（相当施設を含む）数は273館であり<sup>xiv</sup>、現在の5690館の20分の1ほどに留まっている<sup>xv</sup>。また、ユネスコと協力関係を保つ国際博物館会議（ICOM<sup>xvi</sup>）の日本委員会の事務局が日本博物館協会内に設置されたのは1971年のことである。

その後55年を経て、2015年11月17日、第38回ユネスコ総会において再び博物館勧告が採択された。「博物館及びその収集品並びにこれらの多様性及び社会における役割の保護及び促進に関する勧告」である。その35項目にわたる勧告の中で、「博物館の主たる任務」として、保存・調査・伝達・教育の4項目が挙げられている。「伝達」に関する政策として「統合、アクセス及び社会的な包容を考慮すべきであり、また、公衆（通常、博物館を訪問しない集団を含む。）と連携して実施すべき」、「博物館の活動は、また、公衆及び地域社会のための活動によって強化されるべき」と明示があり、潜在的な来館者や地域社会への貢献など、ミュージアムの使命がより明確化されている。

「教育」については、「博物館は、特に学校その他の教育機関と連携して、知識並びに教育上の及び教育学的な事業の策定及び伝承により、フォーマル教育及びノンフォーマル教育並びに生涯学習に従事する。博物館における教育事業は、その収集品の主題及び市民生活について様々な聴衆を教育すること並びに遺産の保存の重要性に関する意識を大きく向上させ、及び創造性を促進するために最も貢献する」とある通り、教育機関との連携のみならず、生涯学習施設としてあらゆる教育や学びに従事する使命、そしてミュージアムの主たる任務の一つである「保存」の機能そのものの重要性を伝えるという使命を再確認している。

国内では2017年12月に全国美術館会議より『美術館の原則と美術館関係者の行動指針<sup>xvii</sup>』が発刊された。これは、国内の学芸員の数十年にわたる努力の結晶である。前掲のユネスコの勧告を含め、これらの恩恵に浴する私たちは、今後これらを自館でどう解釈し、現場で具現化するかが重要になってくる。

#### ■当館を活用した鑑賞プログラムの事例

「フォーラムとしてのミュージアム<sup>xviii</sup>」という概念を日本で初めて公に紹介したのは、1994年に開催された民博創設20周年記念シンポジウム「21世紀の民族学と博物館\_異文化をいかに提示するか」における同館（国立民族学博物館）の吉田憲司氏の発表の中においてである。博物館や美術館の在り方について、既に評価の定まったものを押しに行く神殿のような場を「テンプルとしてのミュージアム」とし、一方、来館者がモノとの出会いを通して人々と議論や対話を始める場を「フォーラムとしてのミュージアム」と表現した。

筆者はこれまで学芸員（キュレーター）という立場から作品の調査研究・公開（展覧会企画等）に携わり、また教育普及担当（エデュケーター、ラーニング・プランナー）として、人々と作品をあらゆる形や方法でつなぐための鑑賞プログラムやアー

ト・ツール等の研究開発・実践を担ってきた。なかでも創価大学との連携事業では、近年、ミュージアムの学際的研究機関としての側面が活かされ、社会科学や人文学等、学問分野の枠組みを超えた活用の広がりがみられ、そうした新しい学びの設計に携わってきた。例えば、教職を目指す学生においては、当館における小中学生の鑑賞授業を実際に担当し、体験を通して学校現場への理解促進につなげるなど、各々の学びの主眼に合わせたプログラムの構築を心がけてきた。鑑賞授業では前掲の「フォーラムとしてのミュージアム」の側面を意識し「対話的な鑑賞」（自らが主体的に作品と向き合い、作品や他者との対話を通して価値を創出する）の実践に努めてきた。このような鑑賞方法は昨今のグローバル時代において必要性が高まっている様々な能力、すなわち、多角的に物事を捉え総合的に判断する力、想像性や創造性を駆使した課題解決能力、多様性を認める包容力、コミュニケーション能力、予期せぬ事態に迅速に判断をくだす能力などの向上に有効であるとして、既にビジネス界や医学界などでの活用が始まっている。今後、教員を目指す学生をはじめ、世界に飛翔しゆく多くの学生に有効なプログラムの一つとして継続・発展させながら取り組んで参りたい。

2008年に完成した常設展示室により、来館者は当館のコレクション形成の一つの特長であるルネサンスから20世紀までの油彩画を中心とした西洋絵画を常時鑑賞できるようになった。こうした空間の固定は一見すると前掲の「テンブルとしてのミュージアム」の機能を高めるようであるが、一方で教育機関との連携においては学習のカリキュラムを計画しやすくなり、また数ヶ月間という Semester 単位の継続した研究にも適するなどのメリットを生み出している。ここでは、当館の常設展示室を活用した鑑賞プログラムについて、2016年度以降の取り組みの中から2つの事例を紹介したい。

#### 事例1) 市内小学校教員による主体的な美術館活用

2017年1月13日、八王子市小学校教育研究会図画工作研究部鑑賞グループの研究授業が当館を舞台に開催された。八王子市立小宮小学校4年生110名の児童が、開催中の「とことん見せます！富士美の西洋絵画」展を鑑賞するプログラムである。これまで当館では、団体鑑賞で来館する小中学生への鑑賞プログラムの一つとして、学芸員によるギャラリートークを実践してきた。しかし、子どもたちが作品と向き合い、作品との対話や子どもたち同士の対話を深める場をつくり出すためには、一つの作品に対して少人数で鑑賞する環境が相応しく、学年単位等複数クラスが同時に来館する場合には複数人の学芸員が対応する必要性が生じ、現実には少ない学芸員の中での対応は困難な状況が続いていた。

そこで、今回の研究授業では、教員自らが作品について教材研究をし、学芸員ではなく複数の教員による教員主導のギャラリートークが試みられた。当日は、110名の児童を9つのグループに分け、それぞれのグループに基本2名の教員がついてギャラリートークおよび自由鑑賞が行われた。約50名の教員や関係者が参観し、終了後の研

究会では、美術館を活用した鑑賞授業を教員が主体的に創り上げたことへの充実感や具体的な課題など有意義な話し合いが行われた。

少人数のグループに分けて鑑賞をすることにより、児童・作品・教員が対話しやすい環境が生まれ、子どもたちから活発な発言が生まれるなど深い鑑賞体験につながったことは大きな収穫であったが、特筆すべきは教員の美術館活用能力が高まったことである。教員は約1年間、当館において準備・打合せを重ね（その詳細はここでは省略するが）、共に協議し課題を解決していった過程の中で学校と美術館が双方向に理解を深め、信頼関係が生まれ、さらには教員の美術館の活用能力が高まったのである。東京都という地域性を生かし、図画工作専科の教員が多いという利点がこのプロジェクトの推進を後押しした。

今回は研究授業として20人を超える教員が本プロジェクトに関わり、前述のような成果を生んだが、一過性のイベントで終わるのでなく、本研究授業を機に数多くの教員が当館に自校の子どもたちを連れて教員自らがギャラリートークをするという実践につなげている。このように、美術館を活用する能力の高い教員が増えることにより、永続的な鑑賞教育の普及につながり、同様に美術館を能動的・主体的に活用する市民が増えることで、美術館は生きた姿で成長し変化し続けるための原動力を得ていると言えよう。

事例2) デンマークの美学研究者による展示室でのオープン・レクチャー

2018年7月5日、当館において、デンマーク在住の美学研究者サイモン・ヘフディング (Simon Høffding) 氏によるオープン・レクチャーが開催された。サイモン氏は著者がデンマークを訪問した折に面会し、来日して研究される機会にあわせて今回のレクチャーが実現した。

ここでの中身の詳細は割愛させていただくが、哲学の一方法論である現象学的見地から「美術館における受動性と参加」(*Passivity and Participation in the Art Museum - a phenomenological exposition*) と題する美学の講義が行われ、創価大学文学部の伊藤貴雄教授と蝶名林亮講師の協力のもと、文学部を中心とする学生約40名が参加した。講義会場は当館の常設展示室第6室の主にエコール・ド・パリからポップアートまでの20世紀美術が展示されている部屋である。終始、講師と参加者が対話しながら進められ、学生からの質問に対する講師や学生同士の意見交換が活発に行われ有意義なレクチャーとなった。

特にレクチャーのテーマである「美術館」の展示室において、講師と参加者が目の前の本物の作品群、19世紀末から20世紀の多様な表現の美術品に囲まれ、展示環境の中に身を置くことで、双方にとってインスピレーションやイメージネーションが活発に働き、レクチャーの深化につながっていた。

本事例以外にも海外招聘研究員による当館を活用した事例は広がりを見せており、異なる文化や視点を共有しながらつくるプログラムは美術館活用の可能性を一層広げ

ている。

### ■デンマーク、アロス美術館の先行事例

2017年3月および9月に筆者はデンマークのアロス・オーフス美術館（Aros Aarhus Kunstmuseum）を視察する機会に恵まれた。デンマーク第二の都市、ユトランド半島の東岸に位置するオーフス市にある同美術館は、北欧最大級の美術館として、2004年4月にリニューアルオープンした比較的新しい美術館である。建物は10階建て、展示総面積6,775平方メートルの巨大な存在を支えているのは、現地のあらゆる人々であった。2度の視察で、館を構成するエデュケーターやキュレーター等へのインタビューを重ね、特に現地のコミュニティと美術館のつながり方や、美術館の使命に適合したファシリティおよびラーニング・プログラムの構築について多角的な知見を得ることができた。ここでは先行事例としてその概要の一部を紹介したい。

国内における美術館来館者の主たる目的は観光を含む娯楽や展覧会鑑賞であるとする、アロス・オーフス美術館ではその他の来館目的で美術館に集う人が多くみられた。多様な人々がミュージアムとの関わり方が選択できる工夫が施されていたと言いつ換えることもできる。このような状態をつくり出すため、教育機関・企業・政府等の組織との連携、そして学生、研究者、アーティスト、ボランティア等の個人との連携がバランス良く適切に作用していたが、重ねて、そうした連携を円滑にするための老若男女、マイノリティ、そして潜在的来館者等への配慮が整備されていた。

大学機関とミュージアムの関係に絞ると、双方が美術館の各分野で戦略的かつ積極的に協力関係を築いている。具体的には作品へのアプローチ方法、パブリック・プログラム、館内ファシリティ、来館者調査など、多様な分野での共同研究・開発がなされ、win-winの知の連携システムが確立されていた。同美術館の近隣に位置するオーフス大学の学生は、まるで大学の一部であるかのように美術館へ次々と来館し、サロンと呼ばれる透明なガラスで囲まれた開放的なレクチャールームで授業が行われていた。また、館内のファシリティには所々にデンマーク国外の大学機関との連携事業による開発であることが明示されていた。

こうした事例をもとに当館と創価大学における今後の連携の方向性を顧みたと、知の遺産が一層大学教育の本質的な学びと結びつく鑑賞を中心としたラーニング・プログラムの構築をベースに、美術館周辺多領域における学術的協力関係の構築にも目を向けて参りたい。例えば、進行中のミュージアム活用能力向上のための各種プログラムの開発や、Google Art project等と連携した作品情報の授業での活用の促進、さらにはマイノリティや潜在的来館者を含む多様な人々と美術館をつなげるための共同研究など、その学術協力関係の意義は大きいと感じている。（平谷美華子）

## V まとめにかえて—課題と展望—

本年2018年は、常設展示室が開設されて10年の節目を迎えるが、その間、来館者、すなわち一般の人々に変化を与えた大きな出来事として2つ挙げたい。一つは、個人のICT（情報通信技術）活用の変化である。例えば、2007年に発売されたiPhoneは、音楽機器と電話機とインターネットを1つにした画期的な機器であったが、今や各社より人工知能を兼ね備えたスマートフォンの開発が重ねられ「スマホ世代」という言葉が使われるほど人々に流通し、人々の生活に変化を与え続けている。

これに対し当館ではフリーWi-Fiの設置をはじめ、主に来館者自身のスマートフォン等の機能を使ったQRコードの読み取りによる作品解説の提供やGoogle Art Projectと共同開発した超高精細画像へのアクセス、さらに人工知能を使った無料音声ガイドの提供などを進めており、活用者は年々増加傾向にある。

もう一つは、2011年3月11日の東日本大震災である。特に国内に在住する者にとって「自然の脅威」以上に、個人の人生観・世界観など価値観が揺さぶられる出来事となった。

当館が所属する全国美術館会議では「東日本大震災復興対策委員会<sup>nix</sup>」を設置し、文化財レスキュー等を行ってきたが、現在でも個人また組織のレベルで何ができるか模索が続いている。その後の度重なる自然災害においても同様であるが、とりわけ近隣地域内での助け合いや日頃の災害に対する備えや教育の必要性が明るみに出ており、日常的につながることや信頼のおける的確な情報を享受することの重要性は高まりをみせている。

当館では2012年度より八王子市内の小中学校を対象とした美術館活用時の送迎バスの運行を開始するなど地域との連携事業を進め、夏休みには近郊市町村への子ども招待券の贈呈、その他八王子市内の各組織との連携やアプローチを続ける中、市外からの学校や教育委員会による鑑賞プログラムの活用も増えつつある。

こうした変化の中で、隣に位置する創価大学との連携は上述したように多くの人々の努力やサポートに支えられ、さらなる活用の広がりをみせている。ここでは本稿のまとめに際し、実際の活用が増えるなかで、より有意義な連携活動に向けて必要性が生じてきている「情報整備」という観点から、以下5点にわたり進行中の課題を列挙したい。

### 1、美術館にアクセスするための情報整備

現在の大学との連携活動は、個人的な美術館スタッフとのつながりに委ねられている部分が多く、大学教員へ美術館活用に関する的確な情報が発信されていない点が課題として挙げられる。いつまでにどのような手続きをすれば美術館を活用した授業ができるかということへの明確な手続き方法の整備とその情報発信が急務である。

## 2、来館時の既存サービスに関する情報発信

さらには、来館した折に既存ファシリティやサービスに関する情報が認知されにくい点を挙げたい。アートライブラリー、ミュージアムシアター、ラウンジ等の既存ファシリティや、写真撮影可能作品、フリーWi-Fi、QRコードの読み取りによる作品解説や超高精細画像へのアクセス、さらには学術雑誌アーカイヴJSTORへのアクセス等のサービスが来館者に認知され、有意義に活用されるように館内サイン等の情報発信に工夫が必要である。

## 3、英語情報の充実

大学の英語の授業や留学生向けの授業、海外招聘教員の授業等での美術館活用が広がっている現在、情報リテラシー能力の高い留学生を含む日本語を母国語としない来館者が増加傾向にある。現在、作品の基本情報（作品名・制作年・作家名・作家生没年・作家出身国または活動した国・作品の形質／技法）は日・英・中・韓の四カ国語表記であるが、作品解説や展示解説、各種サイン等については多言語化されていない。これらについての多言語化、まずは英語表記を充実させることが急務である。

## 4、やさしい日本語<sup>※</sup>の充実

英語を母国語としない者でも簡単な英語表記なら理解できる人が一定数存在するように、日本語を母国語としない来日者にも簡単な日本語表記を理解する人が一定数存在していることがわかっている。勿論、「外国人」と「日本人の子ども」では同じ易しい表現でも理解できる言葉・文章が異なることや、「分かりやすさ」を優先した文章表現をすると品位が失われることなど、対象者を広げる分のジレンマは避けられない。しかし当館の利用者層や潜在的来館者を予測しての各種表記の改善は可能であり、館内サインやパンフレット、ホームページ等基本情報の日本語表記についての見直しに加え、来館者のニーズが高い作品解説の改善にも着手したい。特に、作品解説は研究者や学芸員による専門性の高い記述が多く一般来館者が読んでもわかりにくい難解な記述が含まれている。大学生や子どもたちが自らタブレット端末や検索PC等を用いて作品の調べ学習をする機会が増えているが、外国人のためだけでなく、こうした教育現場での活用や実際の読者に合わせた記述に改善することへの必要性が生じている。

## 5、視覚情報以外の聴覚、触覚情報の充実

障がいの有無に関わらず、より多くの人を受け入れることができる優しい美術館を構築することは、人々に開かれた公共の場としての責務である。昨今、養護学校や特別支援学級等の美術館利用も増え、美術品を視覚以外の形でも提示できるファシリティへのニーズが高まっているが、一般来場者や授業で来館する学生にとっても美術館での体験・体感型のファシリティを希望する人が増えつつある。今後具体的には、3D複製画の制作（視覚、触覚）、触れる彫刻の制作（触覚）、音声解説作品の追加（聴覚）、ワークショップスペースの確保等の検討を進めたい。

最後に、これらの情報整備により、美術館を活用する大学教員・学生が増加し、より有意義な授業の構築と活発な連携活動につながることを希望し、学生や教員、研究者など人的資源と人類の叡智の結晶（当館収蔵品）を結びつけていくことによる以下5点の展望を記し、まとめにかえさせていただきたい。

#### 1、研究の促進

美術品自体の研究はその専門研究員によって状態・材質・歴史等の研究が進められているが、一方で人と作品を結びつける研究、美術館を活用した研究はあらゆる分野の研究者に開かれていることがその美術品・美術館の可能性や価値を広げるためにも重要である。

#### 2、美術品の教育的活用の活発化

美術品の教育的活用は人類の学びに還元する装置としてのミュージアムの使命であり、人々への学びに貢献するという観点から作品そのものの価値を高める行為である。

#### 3、美術文化愛好者、理解者の育成・輩出

美術館活用能力の高い来場者が増えることは、言わば美術館が変化し成長し続ける生きたミュージアムであるための条件にもなるであろう。

#### 4、来館者・リピーターの増加

期間の長短や事の大小に関わらず、美術館での経験や美術館建設に携わる経験をした人々は、美術館への愛着を深め、その広がりが増え来館者増にもつながるであろう。来館者増は美術館の経済的基盤を安定させ、存在意義を高める。

#### 5、グローバルに活躍する世界市民の育成

鑑賞活動によって、時代や文化的・社会的背景、表現意図や制作方法などあらゆる面で異なりをもつ多様な美術品に触れ、それらと対峙・対話することにより、差異を捉え尊重する広い視野が育まれる。このことは前述した「世界市民教育」の一方途となるであろう。

当館においては、創価大学をはじめ地域にこうした win-win の関係を築いていくことを通して、前述したユネスコの勧告や『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』に対する一つの真摯な姿勢として昇華したい。

今後も永久に対面し続ける世界の情勢・動向、予期せぬ事態について、どう人類に貢献し、世界の先駆けをいく機関として成長していくか、創価大学と東京富士美術館は連携を密にして、多分野での学術的協力関係を確立し、双方の機関の永続的発展が望めるコミュニティの構築を目指して参りたい。(平谷美華子)

【注】

- i 文化庁長官官房政策課 (2018) 『あなたにもできる！学校・地域で取り組む「文化プログラム」事例・ノウハウ集』
- ii 吉田文. (2014). 「グローバル人材の育成」と日本の大学教育—議論のローカリズムをめぐる—. *教育学研究*, 81 (2), 164-175.
- iii Kachru, B. B. (1992). World Englishes: Approaches, issues and resources. *Language Teaching*, 25(1), 1-14.
- iv Mauranen A. & E. Ranta (eds.) (2009). *English as a lingua franca. Studies and findings*. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- v Trilling, B., & Fadel, C. (2009). *21st century skills: Learning for life in our times*. San Francisco, CA: John Wiley & Sons.
- vi Rodenhauer, P., Strickland, M. A., & Gambala, C. T. (2004). Arts-related activities across US medical schools: A follow-up study. *Teaching and Learning in Medicine*, 16(3), 233-239.
- vii Housen, A. C. (2002). Aesthetic thought, critical thinking and transfer. *Arts and Learning Research*, 18(1), 2001-2002.
- viii 文部科学省. (2013). 第二期教育振興基本計画. Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2013/06/14/1336379\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afiedfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf)
- ix 経済産業省. (2010). 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会報告書. Retrieved from [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/2010globalhoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf)
- x ここでは、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し」という博物館法第2条における「博物館」を意味し、美術館や資料館・記念館等も含まれる。
- xi 国際連合教育科学文化機関 (2015) 「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」 II. ミュージアムの主要機能. [https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/UNESCO\\_RECOMMENDATION\\_JPN.pdf](https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/UNESCO_RECOMMENDATION_JPN.pdf)
- xii ユネスコ (国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)
- xiii 以下、ユネスコ勧告の仮訳は全て文部科学省ホームページに準拠. <http://www.mext.go.jp/unesco/009/1387063.htm>
- xiv 文部科学省総合教育政策局調査企画課「社会教育調査／昭和35年度 博物館」
- xv 平成27年10月時点の数。文部科学省 (2015) 「2. 博物館数、入館者数、学芸員数の推移」. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_l/08052911/1313126.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1313126.htm)
- xvi ICOM (International Council of Museums；国際博物館会議) は、1946年に創

設された国際的な非政府機関。世界141カ国（地域を含む）から約3万7千人の博物館専門家が参加。地球規模で博物館と博物館専門家を代表する団体として、UNESCOと協力関係を保ち、国連では経済社会理事会の諮問資格を有している。ICOM日本委員会。 <https://www.j-muse.or.jp/icom/ja/>

- xvii 発行：全国美術館会議、編集：全国美術館会議 美術館運営制度研究部会
- xviii 吉田憲司（2013）「民博通信 No.140 評論・展望 フォーラムとしてのミュージアム、その後」。 <http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/publication/periodical/tsushin/pdf/tsushin140-01.pdf>
- xix 平成29年5月25日をもって同組織の災害対策委員会に引き継ぐ形で解散。
- xx 2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会ポータルサイト「やさしい日本語」について。 <https://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/references/easyjpn.html>